

第2学年

富士五湖周辺（浅海教官）

昭和42年10月18日～20日

上野原を起点とし、西湖を経て白糸滝へと抜けた富士山麓巡検は次のことを目的とした。即ち、地形地質の野外観察の態度と記載およびそれに関する文献の理解力を養うこと。対象は、桂川流域の地形および火山地形であった。

第1日：上野原と猿橋で桂川流域の主に段丘地形について観察。桂川は北の小仏層と南の御坂層との間の断層により境された地溝状の地域を流れている。上野原付近の観察では、上野原の町の位置する最も発達した第Ⅰ面（河床165mからの比高75～95m）対岸の鶴島のあるⅡ面（比高25～35m）および比高10mのロームののらないⅢ面が区別できた。Ⅰ面の上には多摩丘陵に連なる山麓緩斜面が認められる。さらにその上流の猿橋では、Ⅱ面に古富士熔岩流の末端が認められた。猿橋の町は主にⅡ面に位置し、「猿橋」はⅡ面の段丘崖に架かっていることになる。

第2日：西湖および紅葉台付近の火山地形の観察。朝、青木ヶ原熔岩流末端の根場の宿を出発、熔岩流が西湖に落ちこむ湖岸を通して紅葉台に向かう。途中、多孔質熔岩、蝙蝠穴を観察、紅葉台ではルートマップ作成、富士火山帯の弱線上（NW—SE）に発達する側火山および新熔岩上の樹海を展望する。その下すぐ南の地帯は、新規熔岩の及ばなかった所で耕作可能な畑地として、周囲の樹海と際だった対照を見せていた。その後鳴沢氷穴、富岳風穴などの熔岩トンネルを見学。この新富士を作る流動性大の玄武岩質熔岩の内部が流れ去った跡の空間で、太陽熱からの遮断と冷却した空気の停滞によって、年間を通じて洞内は低温に保たれるという。

第3日目：午前中根場の崩壊地形、午後は白糸滝など湧水帯の見学。根場の部落は御坂層の山地と青木ヶ原熔岩流にはさまれた小さな谷の出口に位置する。二年前の「山津波」により大きな被害を受けたが、谷の上流の山肌には風化物の供給源となった白い崩壊地形が幾条もみられた。谷の出口の土石流扇状地状の所では、まだ破壊された人家が残存し、直径1.5～2mの巨礫が散在していた。一方では新しい家の建設が部落の南側、すなわち、扇状地の末端から熔岩流末端にかけての微高地で盛んに進行中であった。

富士宮付近は、不透水性の古富士の岩盤を流れてきた地下水が透水性の新富士熔岩の末端から地表に出て湧水帯を形成している。白糸の滝の観察では、上流部は水量が少ないにもかかわらず水量

豊かな滝を形成しているところから湧水による供給を理解できた。この地帯では湧水帯の存在が開発の境となっているという。

以上、今度の巡検は、教科書の模式図から脱け出して実際の複雑な地形地質に初めて接し、思考する場合の時間的空間的尺度の変換を余儀なくされ、また観察を助ける基礎知識の必要性を痛感した。

(3年 木場記)

三浦半島巡検報告 (渡辺・浅井教官)

昭和43年3月1日～3日

「房総や伊豆に多い花卉栽培がなぜ三浦半島には見られないか」とのテーマにより、自然地理的、人文地理的分野を、各々分担して調査検討した。もとより十分であるとは言い難いが、以下このテーマについての調査結果を簡単にまとめてみた。

地形・地質的には、三浦半島と房総半島は類似し、第三紀層より成り低い丘陵を呈している。半島の南端部には、両半島とも海岸段丘の発達が見られ、房総の白浜付近では段丘面に花卉の露路栽培が行われている。これに対し、三浦半島の段丘斜面には伝統的に蔬菜の栽培が主流となっていて、三浦市の野菜粗収入は年間12億円を起える。また花を始めても1・2年で野菜にもどってしまう状態である。伊豆半島の場合は、三浦・房総両半島と全く異なって富士火山帯に属し火山性の高い尾根を形成している。海岸段丘はなく、急傾斜の山地が、直接海に入りこんだ沈水海岸線を呈している。この半島における花卉栽培は火山帯であるという自然条件を有効に使った方法がとられている。以上のように三浦半島と伊豆半島の地形的地質的差異は明らかであり、伊豆半島にある花卉栽培が三浦半島に発達しない原因は自然条件からも一つの説明ができる。しかし、一方、三浦半島南端と房総のそれを考えてみると、南に面した段丘斜面というように、あまり差異はみられないのに、花卉園芸が三浦半島には存在しない。

次に土壌についてみると、花卉栽培に適する土壌は、砂土、植土土壌で、幅が広い。だから火山灰土壌は、花卉栽培に適しているものの一つである。ここで問題とする三浦半島についてみると、大体の地域は、磷酸吸収係数が大きいので、花が広がってしまい、密生しないので花に適さないが、一部の沖積土、重粘土がある地域では、このようなことがなく、花卉栽培が行なわれている。決して、花卉栽培が不可能ではないが、積極的に土壌改善などはせず、むしろこの土壌によく適した大根を栽培する方向へ向うわけである。

三浦半島は、共に海洋(黒潮)の影響を強く受け、東京などの内陸平野部に比べ、海洋性の温和